

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：33109

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12989

研究課題名（和文）人は言語を誰の視点から理解するか：発達段階・文化・母語による違い

研究課題名（英文）Perspective adoption in language comprehension: Developmental, cross-cultural, and cross-language aspects

研究代表者

新国 佳祐 (Niikuni, Keiyu)

新潟青陵大学・福祉心理子ども学部・准教授

研究者番号：60770500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：私たちは言語を理解する際、文や単語の意味内容をあたかも現実のものであるかのように心内で思い浮かべ、擬似経験している（メンタルシミュレーション）と考えられている。本研究では、言語理解中のメンタルシミュレーションにおいてどのような視点が取得されやすいかが、自己主体感・認知的共感性といった心的特性の個人差によって異なることを明らかにした。さらに、およそ小学校低学年の年齢帯にあたる児童の視点取得の様式は、成人のものとは異なっていることも明らかになった。今後はこの知見を発展させ、言語理解中のメンタルシミュレーションの発達過程の全体像を明らかにしたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においてとりわけ意義の大きかった成果としては、言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点取得の選好性が、発達段階によって異なっていることを明らかにできたことを挙げたい。この成果から、視点取得の様式は言語理解能力の発達と関連して変化している可能性を指摘することができ、今後本成果を発展させ言語理解に際するメンタルシミュレーションの発達変化の全体像を明らかにできれば、これまでにない新たなアプローチによる言語発達支援方法の開発につながることをできると考えている。

研究成果の概要（英文）：Previous psycholinguistic studies have shown that, in comprehending language, readers and listeners mentally simulate the action event described in a sentence from a particular perspective, such as an agent or observer. This study explored whether and how inter-individual factors, such as developmental stage, native language, and relevant psychological traits, are associated with preferences for perspective adoption in language comprehension. The main contribution of this study is the revelation that individual differences in the sense of agency and cognitive empathy predict preferences in perspective adoption. Moreover, it was revealed that, unlike adults, children prefer an agent perspective to an observer perspective and are unlikely to use contextual information for perspective selection. A future direction is to clarify the developmental changes in perspective preferences and other aspects of mental simulation in language comprehension in detail.

研究分野：心理言語学、認知心理学

キーワード：言語理解 メンタルシミュレーション 視点取得 個人差 発達段階

### 1. 研究開始当初の背景

我々は言語を理解する際、言語を単に記号として処理するだけでなく、単語や文の意味内容をあたかも現実のものであるかのように心内でシミュレートし、経験をしている(メンタルシミュレーション)という考えが支持されている。例えば、「太陽」という単語を見る、あるいは聞くと、心内で現実の太陽が具体的にイメージされ、それに伴いまるで現実の太陽を目にしたかのように瞳孔が顕著に収縮することが確かめられている(Mathôt et al., 2017)。

言語理解に際して、どのような情報がどのようにシミュレートされるのかに関しては、過去20年程度の間心理学的な実験手法による実証的研究が数多く行われてきたが(レビューとして、Kaschak, 2014; 望月, 2015)、そのなかに、行為事象などのシミュレートがどのような視点から行われるのかを検討したのものがある。例えば、Brunyé et al. (2009) や Sato & Bergen (2013) は、「あなたは今りんごを切っているところです。」という文に対しては図1aのように行為者の視点から、「彼は今りんごを切っているところです。」という文に対しては図1bのように観察者の視点から、それぞれ「りんごを切る」という行為事象のメンタルシミュレーションが行われることを、反応時間を用いた心理学的実験手法を用いて示している。一方で、「今りんごを切っているところです。」のように主語が省略された文のメンタルシミュレーションにおいては、行為者、観察者のような特定の視点の選好はみられないことが報告されている(Sato & Bergen, 2013)。



(a) 行為者視点のイメージ



(b) 観察者視点のイメージ

図1

本研究の着想にあたり着目したのは、上記のような言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点選好の個人差である。例えば、Hartung et al. (2017) は、個人の好みによって取得されやすい視点が異なることを示しており、Brunyé et al. (2016) は、共感的没入傾向(empathic engagement)の個人差が、取得されやすい視点と関係していることを、Brunyé et al. (2009) や Sato & Bergen (2013) と同様のパラダイムによる実験によって示している。このように、言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点選好に関して、個人差要因の大きさが指摘されているものの、その影響を検討した先行研究はきわめて限られていた。

### 2. 研究の目的

以上のような背景から、本研究課題では、言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点選好と関連する個人差要因を特定することを目的とした。研究開始当初は、発達段階、背景文化、母語といった要因に着目したが、新型コロナウイルスによる対面での実験実施の制限などもあり、研究期間前半においては、着目する個人間要因の幅を広げ、自己主体感(sense of agency)や共感性といった心的特性の個人差が視点選好に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする実験を実施した。対面での実験実施制限が比較的緩やかになった研究期間後半においては、特に発達段階による視点選好の変化を明らかにすることを足がかりとして、言語理解中のメンタルシミュレーションの発達変化モデルを提案できる可能性を重要視し、児童と成人の間の視点選好の違いを明らかにすることを目的とする実験を複数実施した。

### 3. 研究の方法

心理言語学的な実験手法を用いた。具体的には、Brunyé et al. (2009, 2016) や Sato & Bergen (2013) と同様に、実験参加者に「今りんごを切っているところです。」などの行為事象に関する文を読んで(または聴いて)もらい、その後に行行為者視点(図1a)または観察者視点(図1b)から行為事象を描写した画像(写真や絵)を呈示するもので、参加者には、呈示された画像に対して、先に呈示された文の内容と一致しているかどうかを判断し、キー押し反応を行わせた。分析指標は、文と画像の一致判断(キー押し反応)にかかる反応時間であり、例えば行為者視点の画像(図1a)が呈示されたときよりも、観察者視点の画像(図1b)が呈示されたときの方が反応時間が短ければ、参加者は文の理解に際して観察者視点からのメンタルシミュレーションを行っていたものと判断された。実験には主として、このような文-画像一致課題を用い、目的や対象者(参加者が児童の場合)に応じて課題内容を調整した。

加えて、心的特性の個人差の影響に着目した実験においては、信頼性・妥当性が十分に確かめられた心理尺度を選定し、検討の目的とする特性の測定に用いた。測定された心的特性の個人差は、文-画像一致課題における反応時間を従属変数とする回帰分析(線形混合モデル分析)において説明変数として用いることで、当該特性が言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点選好にどのような影響を与えているのかについて検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 自己主体感と視点選好との関連について

本研究の第一の成果として、自己主体感の安定性の個人差が、文理解時のメンタルシミュレーションにおける視点取得に与える影響を明らかにした点が挙げられる。自己主体感とは、「自身の行為 (action) と、それによって起こる結果を自分自身がコントロールしているという感覚 (Haggard, 2017; Moore, 2016)」である。関連する実験では、成人 (大学生) を対象として、上述の文-画像一致課題を用いた。自己主体感の測定尺度としては、Sense of Agency Scale (SOAS: 浅井他, 2009) を用いた。実験の結果として、SOAS によって測定される自己主体感の安定性が比較的高い個人は、「りんごを切っているところです。」のような主語省略文を理解する際に観察者視点からメンタルシミュレーションを行いやすいのに対して、主体感の安定性が低い個人は行為者・観察者いずれの視点への選好も示さないことが明らかとなった (図 2)。

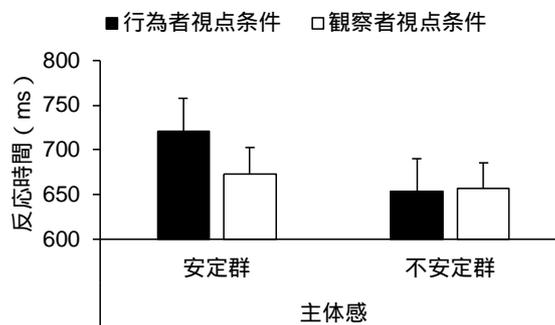


図2

また、上記の実験に関連して、図 3 のような他動詞行為事象絵を先に呈示し、その後能動態動詞 (蹴る) もしくは受動態動詞 (蹴られる) との一致判断を求める画像-動詞一致課題を用いた実験も実施した。この実験でも自己主体感の個人差を測定したが、質問紙尺度ではなく、intentional binding task と呼ばれる課題 (Haggard, 2017) によって無意識的に測定した。その結果、自己主体感の個人差は、言語理解時だけでなく、事象を言語的に解釈する際の視点 (行為者 / 被行為者) の選択にも影響を及ぼすことが示された。具体的には、自己主体感が高い個人は行為者の視点を強く好む一方、自己主体感の低い個人はそれほど強い行為者視点選好は示さないことが明らかとなった (図 4)。

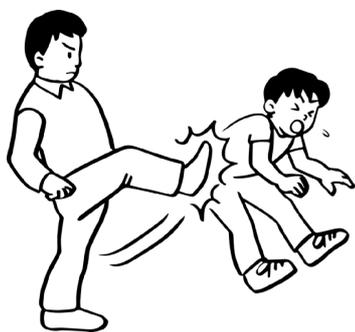


図3

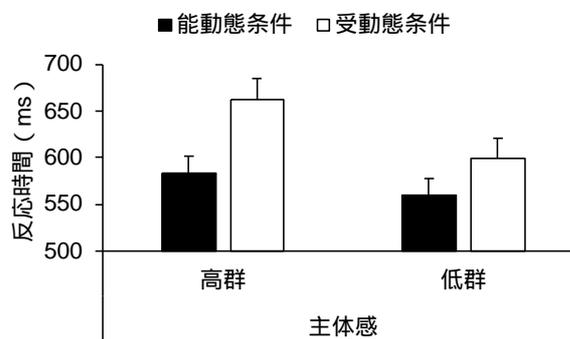


図4

## (2) 共感性と視点選好との関連性について

第二の成果として、共感性の個人差が文理解時のメンタルシミュレーションにおける視点取得に与える影響を明らかにした点が挙げられる。一般に、共感性は感情的共感性と認知的共感性の 2 つの次元から捉えられることが多く (Rogers et al., 2007) したがって関連する実験では、共感性の感情面と認知面を分けて測定できる対人反応性指標 (Davis, 1980, 1983) の日本語版 (日道他, 2017) を用いた。対象は成人 (大学生) であり、文-画像一致課題においては、「あなたは / 山田さんは、アップルパイを作っています。」のような文脈文に続けて「ちょうど今、りんごを切っているところです。」

のような主語省略文を呈示し、その後行為者 / 観察者視点の画像を呈示した。結果として、対人反応性指標のうち、認知的共感性を測定するとされる「視点取得」下位尺度のみに視点選好への影響がみられ、認知的共感性が高い個人は文脈文の主語 (あなた / 山田さん) に応じて異なる視点を選好する (あなた = 行為者視点、人名 = 観察者視点) 一方、認知的共感性が比較的低い個人は、そのような文脈情報を利用した視点選択は行わないことが明らかとなった (図 5)。

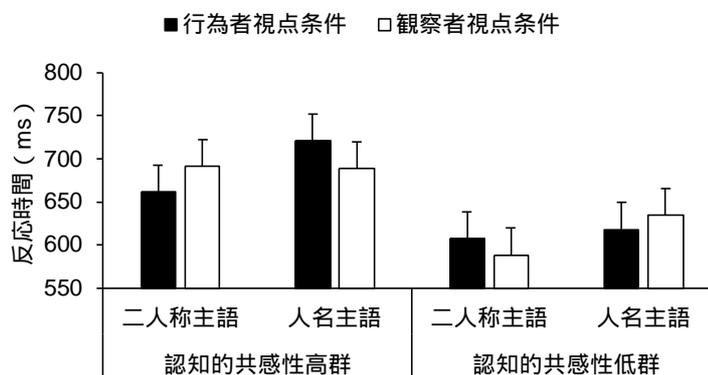


図5

### (3) 発達段階と視点選好との関連性について

第三の成果として、文理解時のメンタルシミュレーションにおける視点選好が発達段階によって異なることを明らかにした点が挙げられる。関連する実験ではまず、6.8歳～10.3歳の児童を対象に、文理解後の画像選択課題を実施した。課題では、2文からなる文脈文に続けて、「○○はいま、にんじんを切っているところです。」のような主語付きの行為文を読み聞かせた。「○○」には、「～ちゃん／～君」のように参加児の実際の名前（二人称主語条件）もしくは「ネコさん」などの動物の名前（三人称主語条件）とした。その後、図6のように、行為文を行為者視点・観察者視点それぞれから正しく描写した絵を含む4枚の絵を呈示し、文内容と一致するものを1枚選択させた。その結果、行為者視点の絵の選択率は、二人称主語条件で73.9（ $SD = 21.4$ ）%、三人称主語条件で71.7（ $SD = 21.3$ ）%であり、この結果から、対象とした年齢帯の児童は、1)行為者視点からの文内容のメンタルシミュレーションを行いやすいこと、2)文中の主語によって異なる視点の選択は行わないことが示された。このような傾向は、先行研究（Brunyé et al., 2009; Sato & Bergen, 2013）や、本研究の大学生対象の実験においてみられた成人における視点選好の傾向とは明らかに異なっており、言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点選択の様式は、幼児・児童から成人期にかけて発達的变化を遂げている可能性が示唆された。



図6

児童を対象とした研究としてはさらに、成人対象の実験同様に、文-画像一致課題を用いた反応時間計測実験も実施した。対象児の年齢は7.2歳～9.8歳であった。画像刺激は図6のような絵を用い、成人対象に同様の手続きによる予備実験も実施した。結果として、参加児全体では、成人同様に画像の視点による反応時間の差はみられなかったが、性別を分けて見ると、男児は行為者視点を好む一方で、女児は観察者視点を好む傾向が確認された（図7）。ただし、この実験は参加者数が合計24名とまだ少なく、結果から明確な結論を下すのは妥当ではないと考えられる。そのため、同実験については今後も継続してデータ収集を行う予定である。

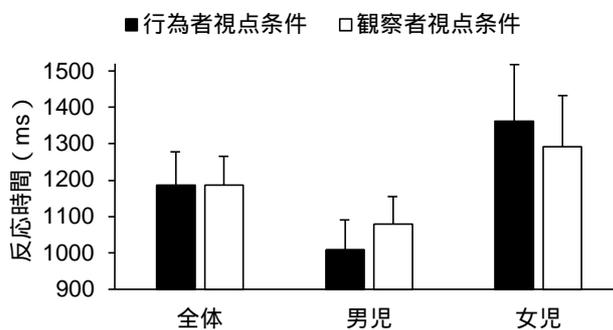


図7

### (4) まとめと今後の展望

以上の通り、言語理解中のメンタルシミュレーションにおける視点取得の選好性に関して、自己主体感・認知的共感性といった心的特性と関連する個人差がみられること、および、児童期と成人期では様相が異なることを実証的に示すことができたことが本研究の主な成果であった。このうち、特に後者の成果に関連して、子ども（幼児・児童）を対象とした言語理解中のメンタルシミュレーションに関する研究は近年になって増えつつあるが（e.g., Hauf et al., 2020; Xu & Liu, 2022）、知見の蓄積が十分であるとは言えず、また、主に子どもが成人と同様にメンタルシミュレーションを行なっていることを示すにとどまっている。そのような動向の中、メンタルシミュレーションの視点取得という側面に焦点を当て、その様相の発達的变化を捉えた点に本研究のインパクトが認められると考えている。

今後の展望としては、上記の通りインパクトの強い成果が得られたメンタルシミュレーションの発達の側面に焦点を当て、その過程をより詳細に明らかにするための研究を計画している。具体的には、言語理解中のメンタルシミュレーションに関して、視点取得も含む幅広い側面を検討の対象とし、現段階で不足している幼児・児童対象の実験データを体系的に収集する。その上で、幼児・児童と成人の間のメンタルシミュレーションの類似性と相違性を整理し、最終的には言語理解中のメンタルシミュレーションに関する発達過程のモデル化をめざす中長期的な研究を構想しており、現在すでにそのための新たな科研費を獲得し実行に着手している。

#### <引用文献>

- 浅井 智久・高野 慶輔・杉森 絵里子・丹野 義彦 (2009). 自己主体感を測定する尺度の開発と因子構造の探索. *心理学研究*, 80(5), 414-421.
- Brunyé, T. T., Ditman, T., Giles, G. E., Holmes, A., & Taylor, H. A. (2016). Mentally simulating narrative perspective is not universal or necessary for language comprehension. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 42(10), 1592-1605.
- Brunyé, T. T., Ditman, T., Mahoney, C. R., Augustyn, J. S., & Taylor, H. A. (2009). When you and I share perspectives: Pronouns modulate perspective-taking during narrative

- comprehension. *Psychological Science*, 20(1), 27–32.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10(1), 85.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 113–126.
- Haggard, P. (2017). Sense of agency in the human brain. *Nature Reviews Neuroscience*, 18(4), 197–208.
- Hartung, F., Hagoort, P., & Willems, R. M. (2017). Readers select a comprehension mode independent of pronoun: Evidence from fMRI during narrative comprehension. *Brain and Language*, 170, 29–38.
- Hauf, J. E. K., Nieding, G., & Seger, B. T. (2020). The development of dynamic perceptual simulations during sentence comprehension. *Cognitive Processing*, 21, 197–208.
- 日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, M. H.・野村 理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成 心理学研究, 88(1), 61–71.
- Mathôt, S., Grainger, J., & Strijkers, K. (2017). Pupillary responses to words that convey a sense of brightness or darkness. *Psychological Science*, 28(8), 1116–1124.
- Moore, J. W. (2016). What is the sense of agency and why does it matter? *Frontiers in Psychology*, 7, 1272.
- Rogers, K., Dziobek, I., Hassenstab, J., Wolf, O. T., & Convit, A. (2007). Who cares? Revisiting empathy in Asperger syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37(4), 709–715.
- Sato, M., & Bergen, B. K. (2013). The case of the missing pronouns: Does mentally simulated perspective play a functional role in the comprehension of person? *Cognition*, 127(3), 361–374.
- Xu, Z., & Liu, D. (2022). Perceptual simulation in language comprehension and Chinese character reading among third-grade Hong Kong children. *Educational Psychology*, 42(5), 587–606.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 小波津豪・赤嶺奨・里麻奈美・新国佳祐	4. 巻 30
2. 論文標題 文理解時の視点取得に共感性の個人差が及ぼす影響：主語省略文と文脈情報の利用に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 206～216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2023.023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Sato, M., Niiikuni, K., & Schafer, A. J.	4. 巻 2
2. 論文標題 High sense of agency versus low sense of agency in event framing in Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 M. Koizumi (Ed.), Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Volume 2: Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors	6. 最初と最後の頁 9～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110778939-002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Xiong, K., Niiikuni, K., Muramoto, T., & Kiyama S.	4. 巻 1
2. 論文標題 Asymmetric effects of sub-lexical orthographic/phonological similarities on L1-Chinese and L2-Japanese visual word recognition	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 M. Koizumi (Ed.), Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Volume 1: Cross-Linguistic Studies.	6. 最初と最後の頁 211～230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110778946-012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kasai, M., Kiyama, S., Niiikuni, K., Tokimoto, S., Cheng, L., Wang, M., Song, G., Todate, K., Suzuki, H., Mugikura, S., Ueno, T., & Koizumi, M.	4. 巻 2
2. 論文標題 Auditory comprehension of Japanese scrambled sentences by patients with aphasia: An ERP study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 M. Koizumi (Ed.), Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Volume 2: Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors	6. 最初と最後の頁 201～222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110778939-011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Niikuni, K., Wang, M., Makuuchi, M., Koizumi, M., & Kiyama, S.	4. 巻 129
2. 論文標題 Pupil dilation reflects emotional arousal via poetic language	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Perceptual and Motor Skills	6. 最初と最後の頁 1691 ~ 1708
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/00315125221126778	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Niikuni, K., Nakanishi, M., & Sugiura, M.	4. 巻 102
2. 論文標題 Intentional binding and self-transcendence: Searching for pro-survival behavior in sense-of-agency	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Consciousness and Cognition	6. 最初と最後の頁 103351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.concog.2022.103351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Wang, M., Niikuni, K., Kato, S., Koizumi, M., & Kiyama, S.	4. 巻 81
2. 論文標題 Individual depression tendencies impede emotional sensitivity to comic poetry	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tohoku Psychologica Folia	6. 最初と最後の頁 45 ~ 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新国佳祐・里麻奈美・邑本俊亮	4. 巻 92
2. 論文標題 自己主体感の個人差が主語省略文理解時の視点取得に及ぼす影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 89 ~ 99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.19045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 新国佳祐・小波津豪・大城彩佳・里麻奈美
2. 発表標題 7-9歳児童における言語理解中の視点選好：主語省略文の場合
3. 学会等名 日本心理学会第88回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 新国佳祐・小波津豪・大城彩佳・里麻奈美
2. 発表標題 文理解中のメンタルシミュレーションにおける視点取得：児童の場合
3. 学会等名 東北心理学会第76回大会・新潟心理学会第60回大会合同大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kohatsu, T., Oshiro, A., Omine, A., Schafer, A. J., Niikuni, K., & Sato, M.
2. 発表標題 From observer to actor: Facial expressions affect children's preferences in perspective adoption
3. 学会等名 The 13th International Conference on Cognitive Science (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Oshiro, A., Kohatsu, T., Omine, A., Schafer, A. J., Niikuni, K., & Sato, M.
2. 発表標題 The effect of facial expressions on event comprehension in children with different empathy skills
3. 学会等名 The 13th International Conference on Cognitive Science (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yano, M., Niikuni, K., Shimura, R., Funasaki, N., & Koizumi, M.
2. 発表標題 Why do speakers use syntactically non-basic sentences? Evidence from pupillometry and functional near-infrared spectroscopy
3. 学会等名 AMLaP Asia 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yano, M., Niikuni, K., Shimura, R., Funasaki, N., & Koizumi, M.
2. 発表標題 Producing filler-gap dependencies in (in)felicitous contexts: Evidence from pupillometry and functional near-infrared spectroscopy (fNIRS)
3. 学会等名 電子情報通信学会 思考と言語研究会 (TL)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kohatsu, T., Akamine, S., Oshiro, A., Niikuni, K., & Sato, M.
2. 発表標題 The effect of subliminal facial expression on perspective adoption during language comprehension in Japanese
3. 学会等名 言語処理学会第29回年次大会 (NLP2023)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大城彩佳・小波津豪・赤嶺奨・新国佳祐・里麻奈美
2. 発表標題 表情の闕下呈示が事象における視点取得に与える影響
3. 学会等名 言語処理学会第29回年次大会 (NLP2023)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新国佳祐・里麻奈美
2. 発表標題 感覚結果の遅延による主体感の操作が事象の言語的解釈に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小波津豪・赤嶺奨・里麻奈美・新国佳祐
2. 発表標題 言語理解時のメンタルシミュレーションにおける視点取得：共感性との関連に着目して
3. 学会等名 日本認知科学会第39回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akamine, S., Kohatsu, T., Niikuni, K., Schafer, A. J., & Sato, M.
2. 発表標題 Emotions in language processing: Affective priming in embodied cognition
3. 学会等名 日本認知科学会第39回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ogawa, Y., Niikuni, K., & Wada, Y.
2. 発表標題 Lexicalization as an ongoing change and the cline of lexicality: A view from the complex negative adjectives in Japanese.
3. 学会等名 55th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sato, M., Niikuni, K. & Schafer, A. J.
2. 発表標題 High sense of agency versus low sense of agency in event framing in Japanese
3. 学会等名 International Symposium on Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives (IJPCP 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akamine, S., Omine, A., Kohatsu, T., Niikuni, K., & Sato, M.
2. 発表標題 Visual perception of vertical motions improves valence word learning
3. 学会等名 言語科学会第22回国際年次大会 (JSLS2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新国佳祐
2. 発表標題 定型詩による感情変化と注意範囲の拡大
3. 学会等名 東北心理学会第74回大会自主企画シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新国佳祐・汪敏・程レイ雅・木山幸子
2. 発表標題 定型詩の鑑賞による注意の範囲の拡大：フランカー課題を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本間優子・新国佳祐
2. 発表標題 デジタル絵本アプリ（タブレット端末）および紙芝居を用いた役割取得能力トレーニング時の年長児の視線行動の相違：子どもの認知発達の促進に向けて
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本間優子・新国佳祐
2. 発表標題 年長児に対するデジタル絵本アプリ（タブレット端末）および紙芝居を用いた役割取得能力トレーニング時の発言回数の比較：能動的体験と受動的体験の相違
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大嶺明李・小波津豪・赤嶺奨・新国佳祐・里麻奈美
2. 発表標題 第二言語において他者表情が多義文の解釈に及ぼす影響
3. 学会等名 言語科学会第22回国際年次大会（JSLS2021）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本間優子・新国佳祐
2. 発表標題 デジタル絵本/紙芝居使用時の大人の子供に対する関わりの特徴：かかわり指標による大人の行動評定
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 木山幸子・大沼卓也・新国佳祐・熊可欣	4. 発行年 2022年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ライブラリ心理学の杜7：学習・言語心理学	

1. 著者名 小川芳樹・中山俊秀（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ハワイ大学			
オランダ	マックスプランク心理言語学研究所			
スペイン	バスク大学			